《書　　評》

大島真夫著

『大学就職部にできること』

（勁草書房，2012年，224頁）

丸山　文裕（広島大学）

本書のタイトル「大学就職部にできること」をみて，手に取る人，読もうとする人は，まずは大学の就職担当の教職員であり，自らの職務遂行に助けとなる何らの知識技能を期待する方であろう。ハウツーものかと思う方が多いだろう。しかし本書は著者の博士論文をベースにした社会学研究であるので，著者が想定している読者は研究者のはずである。はたして名は体を表すのか。結論からいえば，本書は紛れもない研究書である。しかし大学の就職部の役割が，好意的に描かれているので，大学就職部関係者の応援歌にはなろう。

ところで高校生がどのように就職するのかについて，詳しく知っている研究者はそれほどいない。研究者はほとんどが大学院卒であり，高校卒業時はもちろん大学卒業時の就職活動も経験したことがないであろう。そうした研究者にとって，学校による就職斡旋は，教育とは別の学校の善意による行為であり，生徒に喜ばれこそすれ，就職斡旋に問題があるとは想像できないはずである。しかし本書の冒頭で，高校内で選考した生徒を一つの企業に紹介斡旋する慣行があることが指摘されている。これには生徒自らの意思と責任で就職選択をする意欲や態度，能力の形成を妨げ（文部省報告書），職業を選びとる自由と責任を侵害するという（本田由紀）批判がある。その結果大きな問題となっているフリーターやニートを生み出すという。なるほどこういう見方もあったのかと，高校生の就職に関して門外漢には思い知らされる。もちろんこれは高校段階の話であり，本書が問題とする大学段階の就職とは異なる。

本書の第2章は，大学就職部業務の歴史的変遷に充てられている。戦前の状況から始まって，戦後就職協定下の就職斡旋，就職斡旋の衰退，自由応募時代，就職協定廃止の各時期について説明している。ここで残念なのは，これらの歴史的変遷と大学市場や労働市場に関するマクロデータとの関係の説明が，十分ではないことである。大学進学率は一時の停滞期を経て上昇している。大学卒業生数も変化する。一方大卒労働需要も経済状況の変化や，産業構造や職業構造の変化により影響を受ける。また大学から大学院へ進学者数も増え，大卒や大学院卒の就職に影響を与えるはずである。グローバル化，IT化も大卒の採用に影響を与えるはずである。これら外部変動と就職活動との関係が，もう少し詳しく問われてもよいであろう。

第3章では，大学就職部の職員にインタビュー調査を行った結果をまとめている。大学就職部は企業からの求人申し込みから選抜を行い，学生に良好な条件の職を学生に紹介していることが示される。そして企業はかつてのように，学生の選抜を大学に委ねていないことが明らかにされている。第4章では，複数の大規模質問紙調査データを利用し，重回帰分析により，誰が就職部を利用しているのかを問うている。社会科学的方法として，量的分析によって全体像を描き，それによってとらえられなかった部分を，質的分析によって補うのが一般的であるが，ここでは逆の方法をとる。説明が説得的であれば，どちらでも構わないのであるが。それによれば，就職部を利用するのは，一部の学生に限られるということである。また女子学生のほうが，就職部の利用頻度が高い。また親が大学卒業者ではないことと，就職部利用とは無関係であるということである。この結果の意味は説明されていないので，そのようなインプリケーションがあるのか評者にはわからない。

第5章も同様に量的データを使用して，大学就職部を利用する学生の特徴を見出そうとしている。企業採用の決定が遅くなって，就職部によって就職が決まる学生の特徴を見出そうとする。結果は階層的要因，大学の成績，大学生活の違いによる差はないということであった。この章での新たな発見はない。

第6章では，データ分析によって，大学就職部の斡旋を受けると，初職の特徴は何かを問うている。分析によると他の入職経路に比べて，条件の良い初職に到達していることが明らかにされた。そして第2章の結果と整合的に，ここでも大学就職部の斡旋は，学生の選抜を行っていないことが示されている。企業は大学に求人申し込みを行い，学生は大学に就職申し込みを行う。大学の就職部は，どんな企業から学生求人が来ているか，企業にどんな学生が求職しているか，の情報を持ち，それぞれの選択，選別を行うことが可能である。しかし著者によると大学就職部は，学生の選抜をしていないという。これは高校が生徒を選抜して，企業に推薦しているのとは異なる方法である。なぜ異なるのかは説明されてはいない。第4章からこの章までは，調査データの分析を共通

にしており，被説明変数を変えているにすぎない。統計分析は詳細になされてはいるが，出された結論はむしろ平凡である。その平凡さが重要な発見であるとしたら，それを説得的に説明してほしかった。

本書によると大学就職部は学生に開かれ，就職競争において遅れた学生に，条件の良い企業を紹介斡旋している。つまり大学就職部は，学生にセーフティーネットとして機能しているという。セーフティーネットとは「自由な市場において不利な条件のもとにある人に，分け隔てすることなく手をさしのべ良好な条件を提供する」（p.215）とある。望ましい機能を果たしているような感想を持つが，高校はそれがなぜできなくて，大学ではそれがなぜ可能なのか社会学的に問うてほしかった。学生の親の学歴をデータに含んではいるが，就職部と社会階層，大学と社会階層などの関係を問うとか，ほかに社会学的な問いかけがあるわけではない。また社会学的洞察という点でやや物足りない。

本書はもともと博士論文であり，文献レビューによる就職問題の明確化，研究の意義，質的データおよび膨大な量的データの説明，分析方法の紹介，結果の考察とインプリケーションと博士論文のオーソドックスな体裁を整えている。文章は読みやすく，記述もわかりやすい。章ごとにまとめがあるのも親切である。博士論文を出版に結びつけた著者の能力と努力に敬意を表したい。本書を読んで大学生の就職状況について多くを学ぶことができた。以上いろいろ要求を並べたが，素人の感想と高望みであることとしてお許し願いたい。ただしそれらの一つでも当たっているのがあれば，その点をさらに深化させていただくことを望む。